

優秀賞（岩手県知事賞）

三十円の重みに思う

岩手県立一関第一高等学校附属中学校

二年 熊谷 凧紗

自動販売機の前で立ち止まった。ただの何の変哲もない水のペットボトルの前。それは中学校に入学し、電車で登校するようになったある日の帰りのことだ。駅のホームで喉の渴きを覚え、何気なく自動販売機を見た私は、思わず立ち止まった。そこに表示されていた水の値段は百三十円だった。私が水の大切さについて真剣に考えるようになったきっかけは、そんな、とても身近な出来事である。

私の地元の自動販売機では百円均一が当たり前で水も百円だった。そのため、財布に百円玉一枚あれば、いつでも冷たい水が買える。ずっとそれが普通の値段だと思っていた。種類も全く同じ水が、場所が違うだけで三十円も高くなっていることに驚いた。水って、こんなに高かったのだろうか。そんな疑問が頭に浮かん

だ。

最初は、駅だから高いのだろう、便利な場所だから仕方がない、と軽く考えていた。しかし、この出来事をきっかけに水の値段を意識するようになり、調べていくうちに、それが世界では深刻な問題へと結びついていくことを知った。

日本では、蛇口をひねれば安全な水が出る。自動販売機も街中にあり、少し喉が渴けばすぐに水が買える。私にとって水はあるのが普通の存在で、なくなるかもしれないものと考えたことはほとんどなく、値段を比べてから選ぶ必要もなかった。私は、水というものの価値を意識することなく、当たり前のものとして受け取っていたのである。

しかし、世界に目を向けると、その感覚がどれだけ恵まれているかが分かる。中東やアフリカの一部では雨がほとんど降らず、飲み水を確保すること自体が生活の最優先課題となっている。そこでは水を得るために長い距離を歩いたり、限られた量を家族で分け合っ

たりすることも珍しくない。

イスラエルやシンガポールのように自然の水資源が乏しい国では、海水を淡水化したり、使った水を高度に浄化して再利用したりして水を確保しているが、そこには多くの費用とエネルギーが必要となる。そのため、水の価格は日本よりも高くなる。場所によっては、ペットボトルの水が三百円や四百円以上することもあ。駅で見た百三十円という値段が世界的に見れば安い方だと知ったとき、私は大きな衝撃を受けた。一方で、水不足が深刻でも補助金によって水の価格が抑えられている国もあることが分かった。しかし、それは本当のコストを隠しているだけで、将来に大きな危機を抱えている可能性がある。

このように考えると、水の価格は単なる商品としての値段ではなく、水の希少性や、それを守るための努力が反映されたものだと分かる。

では、水の価格が上がる中で、私たちにできることは何だろうか。まず、無駄に水を使わないことである。

歯磨きの際に水を止める、シャワーの時間を意識するといった行動は小さく見えるが、多くの人が続ければ大きな効果を生む。また、私は外出するとき水筒を持つようになった。これは節約になるだけでなく、ペットボトルごみを減らすことができるため、水資源を守る行動につながる。

さらに、水の問題について知り、考え、それを周囲と共有することも大切だ。日本では使えることが当たり前の水が、世界では当たり前でないという意識が広がれば、行動も変わるはずである。

地元では百円だった水が、駅では百三十円だった。その三十円の差で水の価値を知った。私の景色が変わった。あって当たり前と思っていた水は決して無限ではなく、国や地域によっては生活に直結するほど貴重な資源である。あの日の小さな驚きを忘れず、水を大切にしていきたい。

優秀賞（岩手県知事賞）

水を止めた、その瞬間から始まった問い

岩手県立一関第一高等学校附属中学校

三年 佐藤 由実

日照りのニュース、環境保全のポスター、校外学習、SDGs。これまで私は「節水」「水を大切に」という言葉を何度も目にしてきた。いつものフレーズ。水を大切にしよう。分かりきったこと、当たり前すぎて真剣に考えたことは正直一度も無かった。しかしあるニュースが、その考えを変えた。

二〇二六年一月二〇日、国際連合大学が旗艦報告書の中で「世界は水破産の時代に突入した」と警告した。「水破産」とは、水を使い尽くして元に戻せなくなりつつある状態のことをいう。気候変動や過剰な利用、汚染により、世界の水システムがもう回復不能の状態に近づいているのだ。

このニュースを聞いて衝撃を受けた。世界で水不足が進んでいることは知っていた。あの、何回も聞いた

節水のフレーズ。しかし、その時初めて、現実が想像をはるかに超える規模だと理解した。

この事実を知った夜、いつものように歯磨きを始めた。出しゃばなしの水。そこでハッとした。眠い目を擦る。「水破産」慌てて水を止めた。急に静かになった洗面台。その静けさが、今まで自分がどれだけ何も考えずに水を使ってきたかを、突きつけてくるようだった。胸の奥がざわついた。ふと疑問に思った。勢よく流れる水道の水。綺麗で安全な水。もしこの水が、ある日突然使えなくなったらどうなるのだろうか。

折しも、この三月に、愛媛県の宇連ダムの貯水率が〇パーセントになったという報道を知った。農業や工業、飲み水、私たちの生活の基盤を支えている水。それが実際に突然使えなくなる。世界で起きている問題が日本にも迫りつつある。遠い国の危機だと思っていた水不足は、いつの間にか私の足元まで来ていた。このことに私は改めて気付かされ、大きな不安が残った。私の地域はどうだろう。去年の夏、胆沢ダムが貯水率

約五パーセントを記録した。これは、水がいつ止まってもおかしくない深刻な数字だった。岩手県内の複数のダムでも、貯水率が一〇パーセントを下回る事態が起きていた。あの時新聞を読んでいた父が、「もう一〇パーセントもないって。大丈夫かな。」と不安気に言っていたことを思い出した。

私に何ができるのだろうか。この事実を知ってから、実際に節水を意識するようになった。流しっぱなしにしている水を止め、自然と環境問題に関心を持つようになった。最近の水のニュースをよく見るようになって、家族や友達にも話すようになった。「節水心がけてみようかな。」と言われた時は、自分だけではない、身近な人から広がっていく感覚がじんわり嬉しかった。世界の水不足を一人で止めることなど到底無理なのではないかと思う。巨大な問題に対して、私の行動はあまりにも小さく、微力だ。しかし、微力だから無意味なのではない。微力だからこそ、始まりになれるのではないか。あの夜、歯磨き中に水を止めたときの胸の

ざわつきは、確かに私の中に変化が生まれた証だと思う。

節水とは、ただ水の使用量を減らすことではない。「水は当たり前前にあるものではない」と意識することなのではないだろうか。シャワーを流しっぱなしにしないこと。食べ残しを減らし、無駄な水の使用につながらる食品ロスを出さないこと。小さな行動でも、その一つ一つが水を守る選択になる。

「節水」「水を大切に」。何度も聞いてきたこの言葉。もうただのフレーズではない。水は有限で、失えば戻らないかもしれない大切な資源だ。その事実を忘れずに、私は水を使うその一瞬一瞬に、目を向けていきたい。水と向き合うということは、未来と向き合うことだ。廊下の水のポスターの前で立ち止まる。私は、すっと背筋を伸ばした。

優秀賞（岩手県知事賞）

あたりまえの水

岩手県立一関第一高等学校附属中学校

二年 鈴木 涼花

私の家では食洗機を使っている。きっかけは家を七年前に引っ越したことだ。そのタイミングで、「節約になるから」と食洗機を我が家に導入した。水の使用量がより少なくなるため、費用が抑えられるのだ。手洗いをしていた頃は、四人分の食器を、約五〇リットルの水を消費して手洗いしていた。しかし食洗機を使うと、約八リットルの水で済む。およそ六分の一も使用量が減る。こんなにも大差があると知った時は衝撃を受けた。同じ目的で水を使っているのに、その活用方法によって使用量が左右されてしまうと分かった。このように日常の一部で利用してきた水。それにも限りがあり、なくなることもあると実感した。日本では最近、降雨量が少なく水不足に陥っている。去年は、私が通う学校と近い栗駒ダムで、貯水率が約二パーセ

ントまで下がった。ここ一週間でも、雨の予報をあまりニュース番組で見ないようになった。梅雨に向けてだんだん降水量が多くなっていく春。しかし雨を見ていないということは、実は非常事態なのではないか。ここまで日本が渇水していることを改めて理解した。今まで当たり前に使っていたからこそ、水について深く考えていなかった。だから今の水の危機をすぐに認識できていなかったのだ。これらの現実をもう一度見直すと、水資源がなくなって日常生活が成り立たなくなるのではないかという恐怖が湧く。

しかし世界に目を向けると、水がないことが当然な国が多々あるのだ。西アジア周辺の国々は、生活用水が十分になく、常に渇水している。水がないと飲み物を手に入れないことはもちろん、入浴、掃除などができず、清潔な環境を整えられないのだ。冒頭の節水以前に、そもそも水が確保できない環境。あなたはそんな生活を思い描けるか。または実際に耐えることができるだろうか。

実は日本でも過去に同じ状況に陥ったことがある。二〇一一年東日本大震災だ。東北地方では水道施設が被害にあい、補給がないと水が使えない状況だった。水は綺麗な環境を保つために必要だ。避難所に多くの人々が密集して過ごす。誰かが病気にかかってしまうと一気に集団感染が起こるかもしれない。水分が足りず倒れるかもしれない。水は人命に関わる貴重な資源なのだ。

いっどこで災害が起き、水が使えなくなるのか分からない。当時は非常時のための備蓄の意識が低く、個人の必要物資が足らなかったこともあった。これを機にローリングストックという備蓄方法が広まった。いつも日常生活で使う物をいくつか備蓄しておき、使用期限が近づいたら、消費と補充をするという方法だ。このストックをすると、常に水が家にあるようになる。非常時でも水が十分に使えるように、日頃から対策をすると困らないだろう。

さらに、水資源には限りがあるため、日々の生活内

の節水も意識しなければいけない。そこで私は、水のスリーアールという考え方を推進したい。本来スリーアールは、ゴミを削減するために必要な三つの考え方をまとめた名称だが、環境のための対策という観点で共通するところがあると思う。これを水に置き換えると、リデュースは水そのものの量を減らすこと、リユースは使った水資源を繰り返し使うこと、リサイクルは水を再利用するという意味になる。リデュースは蛇口をこまめに止めたり、ため洗いをしたりなどが挙げられる。冒頭の食洗機の話もこの部類に入る。リユースには、風呂の残り湯を使うことなどが入る。このような身近なことからでも、少しの意識と実行で節水は可能だ。

水は無尽蔵ではない。私たちが生きるために大切な資源だ。だからこそ水との生き方について、もう一度考えてはどうだろうか。

優秀賞（岩手県知事賞）

もう一度水を大切に

盛岡中央高等学校附属中学校

二年 西山 ゆかり

水は、私たち日本人にとってあって当たり前のものだった。しかし、その当たり前が崩れつつある。最近、川が枯れている、というニュースをよく耳にしなかつただろうか。見えないはずの川底がはつきりと見えたり、ダムの水が明らかに減っていたりと水不足を実感しなかつただろうか。水不足をなくして、いつでも当たり前前に水を使えるようにするにはどうすればいいのか。世界では当たり前でない「綺麗な水がいくらでも出てくる」私たちの日常について改めて考える。

まず、近年日本で起こった水不足を調べた。

ここでは特に興味深い二つを紹介する。一つ目は、新潟県上越市で二〇二五年七月に発生した水不足だ。七月一五日、市民に対し四〇%以上の節水を要請すると

いう、一九九四年以来の事態に陥った。

同年四月に発生した導水管破断事故により、主要な生活用水の供給源である城山浄水場での取水が不可能となった。そのためもう一つの主要水源である正善寺ダムに頼らざるを得なくなったのだが、本来であればダムで水不足をある程度回避できるはずだった。しかし七月の上越市高田での降水量はわずか一・〇ミリメートルと、一カ月間の降水量としては一九二二年からの観測史上最少という記録的な少雨となった。その影響でダムの貯水率が例年より六〇%ほど減少していたため、水不足を回避できなかつたのだ。

二つ目は、二〇二六年二月に入り貯水率が大幅に低下した高知県の早明浦ダムによる水不足だ。これにより二月二十日から香川県内を支える香川用水への供給量を三〇%制限する「第二次取水制限」が開始された。冬季にこれほど大きな制限が行われるのは一九九六年以来三〇年ぶりだそうだ。

これらからわかるように、日本の少雨による水不足

は年々深刻化している。しかし、ここで、一つ疑問に思ったことがある。豪雨による被害も深刻化している、ということだ。豪雨とはまさに少雨の対義語で、激しく多量に降る雨を指す。ゲリラ豪雨とよばれる、都市で局地的に短時間だけ降る集中豪雨もよく起こっているように感じる。例として、二〇二五年八月八日頃から鹿児島県で線状降水帯が発生し、記録的な大雨となった。気象庁が鹿児島県霧島市に大雨特別警報を発表し、警戒レベルで最も危険なレベル五の緊急安全確保が発令されたほどの大きな被害があった。つまり、豪雨と少雨の極端な気候になりつつあるのだ。

水が溢れたり、枯渇したりと不安定な今。安定さを取り戻すため、私たちに何ができるのか。とても簡単で、今すぐにできることとしては、やはり水の「出しゃばなし」を控えることだろう。水を大切に、という概念こそが今の水不足の日本で最も大切だ。小さな積み重ねが大きな成果を生む。また、豪雨対策として有効かつ簡単なものに、「雨の日は大量の排水を控える」

がある。豪雨の際は大量の雨水が下水道に流れ込むため、それ以上なるべく下水道に水を流さない方が良いのだ。そうすることで、下水の逆流や下水施設での被害を減らすことができる。

これまで私たちにとって当たり前だったことが、当たり前ではなくなっている。近年の水不足は、水が流れている当たり前の大切さを知るためだったのかもしれない。水の大切さを実感した今だからこそ、もう一度その当たり前を実現したい。

優秀賞（岩手県知事賞）

蛇口の向こう側にある平和な未来

岩手県立一関第一高等学校附属中学校

二年 平沢 慶佳

陸上部に所属する私は、照りつける太陽の下、毎日グラウンドで汗を流し、練習後は、当たり前のように蛇口をひねり、冷たい水を飲む。その瞬間、生きていくことを実感する。

平泉の実家は、先祖代々、田畑を営む農家で、現在は祖父母が農業を営んでいる。休みの日に訪ねると、きれいに整地された田畑が、いつも美しい田園風景を広げている。祖母は、いつも私に教えてくれる。「水がきれいなところは、空気もきれいで、米や野菜がおいしいんだよ。だから、人の心にも余裕ができて、みんなに優しくなれるのさ。」その言葉の通り、澄んだ水に育まれた米や野菜は、驚くほど味が濃くて、甘くおいしい。祖父母が作る米と野菜は、いつも私の心と体を満たしてくれる。このような美しい景色があることを

当然のこととして育ち、きれいな水と空気、豊かな農作物を食べて、私は育ってきた。

しかし、世界に目を向けると、この当たり前が当然ではない国々が多くある。イランを含めた中東諸国では、飲み水の大部分を海の真水から作る「海水淡水化プラント」に依存している。現在、中東諸国の八〇％以上が深刻な水不足にあり、二〇五〇年頃には、大部分の国々の人々が、深刻な水不足に陥るという。このような状況下でありながら、イランとアメリカの間で戦争が起こり、ホルムズ海峡のケシュム島の海水淡水化プラントに攻撃がなされた。もし、これらの施設が完全に破壊されてしまったら、多くの人々の命が奪われてしまうことになる。喉を枯らして、水を求める人たちの命は、今後どうなるのだろうか。そのようなことを考えただけでも恐ろしい。水は、人が生きるための権利であり、それを奪うことは、人間だけではなく、地球の命を奪うことと同じである。

かつて、中東諸国の海水を淡水化する技術は、燃料

を燃やし、海水を蒸発させるものであった。現在では、日本企業の優れた膜技術（逆浸透膜）で、半透膜から不純物を取り除き、純粋な水を生成するという高度な技術が取り入れられている。日本企業の世界最高水準の技術が、過酷な環境下にある中東の人々の命を救い、砂漠を潤してきた。日本の技術は、中東諸国の人々の命を支え続け、誇るべき貢献をしてきたのである。

しかし、どんなに優れた技術で支援してきたとしても、一度紛争が起きてしまうと、真っ先に敵国から狙われる弱点となってしまう。ただでさえ、気候変動による気温上昇で、水が貴重とされる時代において、水という命の源を破壊することは、間違いであると思う。日本の水の技術を、共生のために使うことはできないのであろうか。自らの国の利権を守ることだけではなく、もう少し相手に対して、思いやりの心を持ってほしい。

八月一日の水の日を前に、私は決意する。

自分ができることは小さいことであるが、水を大切に

することから始めたい。第一に、祖父母が守ってきた農作業を手伝い、豊かな水環境を守っていくこと。第二に、世界の人々を救う日本の技術の価値を正しく知ること。最後に、水を無駄にしない生活を心がけると。こうした当たり前の行動を実践することで、水不足に苦しむ世界の誰かの喉を潤し、命を助ける一滴になると信じている。

日本のように、蛇口をひねることで水が飲める幸せは、他の国では当たり前のことではない。戦争の攻撃の恐怖におびえながら、水を必要としている人々も多々いる。私は、海を渡った先にある日本の水の技術が、破壊の対象ではなく、永遠に平和の象徴として、人々の命を支え続ける未来であることを願う。そして、その未来を守り続けるために、多くのことを学び、争いを一秒でも早くやめること、平和を願うことを、微力ながら発信し続けていきたい。

佳作 （岩手県知事賞）

水の日

岩手県立一関第一高等学校附属中学校

二年 伊東 絢菜

八月一日。水の日に生まれた私にとって、水は昔から当たり前にある存在だった。しかし、その認識の甘さを、あの日突きつけられた。

あれは七月の雨の日だった。いつもの通学路を歩いていると、何度も傘が風でひっくり返りそうになった。学校に着く頃には、体もランドセルもすっかり水浸しになっていた。学校の窓の外は白く曇り、朝は見えていた校庭の向こうは見えなくなっていた。休み時間になるたびに、クラスの誰かが「やばい」と言って窓を覗き込む。周りが不安げな表情を見せながらも、私はどこか他人事のように感じていた。テレビの中の出来事のように自分に危険が迫っているとは思えなかった。そして、昼が過ぎた頃「家族への引き渡しを行います」と先生が緊迫した表情で呼びかけた。思わず、握

っていた鉛筆を机の上に落とした。それから先生は、家族の迎えが来るまで教室で宿題や読書をして待機するようにと、説明した。いつもは賑やかな教室も、鉛筆の音だけが続いていた。少し経つと、父は妹を連れて迎えに来てくれた。帰りは、重いランドセルを肩に食い込ませながら歩いて帰った。雨が顔に叩きつけられて、目を開けるのもつらかった。どこが道でどこが水たまりなのか分からなくなり、一歩踏み出すたびに不安が広がった。妹に「大丈夫だよ」と言いながら、自分の声が震えているのが分かった。家に帰ってすぐにランドセルを下ろし、テレビをつけた。「家で過ごし雨から逃れてください」というニュースのアナウンサーの声がした。画面には濁った水が道路を覆い、車がゆっくりとしか進めない様子が映し出されていた。家は安全なんだと思うと肩の力が抜けた。

あの時、三日前から土砂災害警戒情報が出ていたと知ったとき、「知らなかった」では済まされない気がした。私が歩いていたあの道も、安全とはいえなかった。

だからこそ、引き渡しが行われたとわかった。被害者が出ていたことを知り、水害はすぐ近くにあると実感した。

水は、ただ綺麗で安全なものだと思いついてきた。しかし、あの日の水は、決してそれだけではなかった。水に怖さを感じてこなかったのは、水に害はないと決めていたのだ。少なくとも私は、危険を理解しようとしていなかった。その思い込みがあったからこそ、あの日、私は怖がることしかできなかった。水は人の生活を支えるが、同時にそれを壊す力も持っていた。あの日以来、私は天気予報の見方が変わった。ただ「雨が降るか」に注目するのではなく、その強さやどれくらいの時間降るのか、警報の意味にも目を向け、水害が起こるか考えるようになった。川を見るときも、景色ではなく、水位や流れの速さを見るようになった。ニュースで「家で過ごしてください」と呼びかけていたのは、多くの人の命を守るためだったと気づいた。その情報を生かせるかどうかは、ひとりひとりの行動

にかかっている。

これからは、水の危険性を正しく理解し、自分の身を守る行動をとれるようになりたい。

家族や友人に雨の日は声をかけていきたい。

水を甘くみていたあの頃には、もう戻らない。水の日には生まれた私は、水の恵みだけでなく、そのきょういも知った。あの日、怖かったのは雨ではない。何も知らず、何も考えずに歩いてきた自分自身だった。だからこそこれからは、水と向き合い、考え、行動できる人でありたい。あの日の恐怖を、ただの記憶で終わらせないために。

佳作 (岩手県知事賞)

水と生きる

盛岡市立見前中学校

三年 蔵谷 環

約十年前にSDGsの十七の目標が発表され、最近ではもう世間に浸透しきっているのではないでしょうか。その中で、六番に設定されている「安全な水とトイレを世界中に」というものがあります。これは、二〇三〇年までに、全ての人々に安全かつ安価な飲料水を行き渡らせることを目標としたものです。しかし、水は命の基本であるにも関わらず、未だに安全な飲料水が行き渡っていない地域があります。というのも、世界には約一九六の国が存在していますが、そのうち水道水を直接飲むことができる国は、たったの一か国しかないのです。日本もそのうちの一か国であり、こうしてみると日本は水の普及率において、とても恵まれていることが分かります。そのため、水がない環境におかれることを想像しづらい人も多いのではない

かと思います。

そもそも、私たちは一日に何リットルの水を使っているのか、知っていますか。私たちは、一日に約二百リットルの水を使っているそうです。まず、朝起きて歯を磨いたり、顔を洗ったり、水を飲んだり、夜には料理に水を使い、そして、一日に何回も手を洗って、トイレに行って、その度に水を使っています。

このように、私たちの生活に密接に結びついている水は、あって当たり前の存在になっており、一日でも使えないとなると、生活に大きな支障が出ます。

私の住む東北では、十五年前に東日本大震災が起きました。地震による大きな揺れ、そして沿岸地域を襲った津波など、広い地域が大きな被害を受けました。そして、生命を維持するのに欠かせない水が断られた地域もありました。調べてみたところ、宮城県気仙沼市ではおよそ二七〇日間もの間断水が起きたそうです。もし自分の住む地域に断水が起き、明日から二七〇日間も水が普段通りに使えないとしたら。今まで水は

そこにあつて当たり前だと思つていても、急な災害などによつて、使えなくなることがあります。そして、それが自分の住む地域に起こる可能性も充分にあるのです。

また、私の祖母も沿岸に住んでおり、短い間でしたが断水の被害を受けたそうです。幸い、祖母の家には井戸が通つており、大きな被害に苦しむことはありませんでしたが、祖母は、普段通りの生活ができないことにすごく不安とストレスを感じたそうです。

水がきれいな国であり続けるために、一日の中でも水を大切に使う工夫はたくさんあります。例えば、歯磨きをするときに水を流しっぱなしにしない、洗濯するときにはできるだけだけまとめ洗う、食器を洗う前に油を拭き取るなどです。また、私はよく道の端にごみが落ちているのを見かけますが、河川から離れていても、雨や風によつて河川へと流れていつてしまうことがあるそうです。当たり前ですが、小さいごみだからと思わずに、自分が出したごみに責任をもつてごみ箱

に捨てることも地域環境を守ることにつながっていきます。

このように、ひとりひとりが生活を豊かにしてくれる水に感謝して生活することで、地域環境を守つていくための大きな力になります。百年後、二百年後もきれいな水がある日本であり続けるために、今から水に感謝する気持ちをもつて小さなことから行動していきませんか。

佳作 （岩手県知事賞）

清らかな水のままに

岩手県立一関第一高等学校附属中学校

三年 佐々木 果歩

水音をさせて一枚一枚水田を満たしていく水。散歩をしながらこの音を耳にする。そのたびに、またこの季節が巡ってきたことに気づく。毎年この繰り返し。この水は、どこから流れてきたのだろう、いつから流れているのだろう。水音が時代を超えて、遙か遠い彼方から聞こえてくるように思えた。

私は平泉町に住んでいる。最近、家族で父の田んぼの畦づくりを手伝いに行った。そのとき、昨年父がよく田んぼの水の確認に行っていたことを思い出した。気になって見てみることにした。そこには、土管のようなものが埋まっていて用水栓を捻ると、下から水が出てくる仕組みになっていた。それを見て、地下水を汲み上げているのだと思った。しかし、それは違ったのだ。

近くから水の音が聞こえた気がした。どこから水が流れているのかもしれない。音の出所が気になって、田んぼ道を渡って行くことにした。道がすぐコンクリートに切り替わって、音のする場所を見つけた。そこには、大きな穴があり、その横から水が流れてきていた。そして、私の歩いてきた方向へ水が流れていたのだ。水源が気になって辿ってみることにした。その道は、途切れることなく続いていた。歩いて歩いて、いつの間にか家の前を通りすぎてしまっていた。ところが、用水路は途切れることなくずっと見えなくなる距離まで続いていた。

それから、用水路のことがなんとなく気になって図書館に行って調べてみることにした。『一関地方ゆかりの人物事典』(二〇一五年三月三十一日発行 NPO法人一関文化会議所)によると、「照井堰」と言って、水は磐井川から流れているとのことだった。磐井川は、私の学校の近くに流れている馴染み深い川だ。しかし、それ以上に驚いたことがある。今流れている用水路は

なんと平安時代に造られ始めていたことだ。藤原秀衡の家臣、照井太郎高春という人物が企画し、工事を始めたことを知った。

さらに、『照井堰とそれを完成させた照井太郎高春のお話』（水土里ネット照井）を調べたところ、このようなことが分かった。今から約八百五十年前、磐井川の下流に住む村人たちは深刻な水不足に悩んでいた。それを聞いた高春は村人たちを救うため、照井堰を造り始めた。高春は命をかけて工事に取り組んだが、命を落としてしまった。しかし、その息子、照井太郎高安がそれを受け継ぎ、完成させたのだ。それによって約千ヘクタールの面積にまで水が届いた。これは今も受け継がれてきた伝承である。

他にも、私の学校がある一関という名前は、初めての堰、一ノ堰に由来しているという説を知った。例えば、磐井川と合流する北上川の氾濫をせき止めるための堰だ。一関市では北上川や磐井川など、地形的要因から川の氾濫が古くからあったそうだ。また、一関市

の特産品は米である。きっと昔からもち米を育てるための水田が多かったはずだろう。そこに用水を引くための堰があったといえる。遠い昔から地域の生活と水が深く結びついていたことが分かる。

驚いた。こんなにも水は私たちのすぐそばにあった。私たちの歩く道には水が流れている。私たちの身近にある水はこんなにも昔から届いていたのか。どうして今まで気づかなかったのだろうか。

どこまでも続く水の流れ。その水は山を越え、時を越え、私たちの元へと届いている。先人たちの努力によって、今を生きる私たちはお米を食べて生きている。そして、私たちもやがて未来へ水を届ける過去の一人となる。この水を伝えていきたい。伝承がつながれていったように。平安から届けられた水が清らかなままに。

佳作 （岩手県知事賞）

水をたくさん飲む？ 飲まない？

奥州市立水沢中学校

三年 高橋 風花

「水」それは無色透明の液体で、甘くも辛くもない。日本では、蛇口をひねればいつでも安全な水が流れる。けれど、私は喉が渇くと毎回お茶を飲む。理由は単純で、水より美味しく、飲みやすいからだ。だから、「私はあまり水を飲まない方だ」と思っていた。

私の親は、よくカレーを作ってくれる。中でも、特に印象に残っているカレーは「無水トマトカレー」だ。

私たち六人家族のカレーを作る際の約八百ミリリットルの水を一切使用せず、多くのトマトの水分で補ったそう。いつもより濃厚でコクがあり、美味しかったことを覚えている。後で調べたところ、トマトの約九十五パーセントは水分できていると分かった。

一つ、再認識したことは、「無水トマトカレー」は水の代わりにトマトを使用していたが、本来カレーを作

る際には、たくさんの方が必要だということ。

この時の水は、カレールーを溶かして茶色に変化し、とろみがついている。

そもそも、トマトの水分はどこから来るのか。それは、根から吸収した水からだ。トマト一個を収穫するために必要な水の量は約五十リットルで、吸収された水はトマトの体内で栄養素と混ざり合い、果実に蓄えられているのだ、と調べて分かった。多くの野菜や果物は水分で構成されている。水分の正体は栄養素と混ざり合った「水」で、私たちは野菜や果物を食べる度、「水」を摂取しているのだと思った。

さらに、カレーと言えば米。日本の主食は米だ。米作りに必要不可欠なものも「水」で、毎年夏になると、田んぼ一面に水が張る。水を張ることには、酸素を遮断し、雑草の種が芽を出せなくすることや、寒さから守るためなど、重要な役割がある。また、米を炊くにも水が必要で、米一合に対して水は約三百ミリリットル使用する。水を吸った米は芯まで柔らかく、旨味が

引き出されていてとても美味しい。

こうして、カレー一つとってみても、私たちは多くの水を知らぬ間に摂取していた。カレーの場合は、カレースープ・野菜・米から。

水は何かに溶け込み、色や味が変化したり、あるいは吸収されて見えなくなっている場合がある。その場合、「水」の概念がなくなってしまうている。しかし、私たちは水そのものを飲むだけでなく、水を料理や野菜、果物を通して取り込んでいる事は確かである。

手を洗う水や、浴槽に溜まっているお湯は無色透明の液体で、私たちが知っている本来の姿の「水」だ。だからこそ、本来の姿ではない「水」を私は「水」と認識できていなかった。

水道水の水は無色透明の液体で、味が無くて、美味しいとは思わない。なので、そのまま飲むことは少ない。けれど、水を吸収した米は甘くて、カレールーを溶かした水は米が進む。茶葉をしばらく入れておいた水は、私がよく飲む清涼飲料水だ。考えれば考える程、

私たちが口にしてきた多くの飲食物には水が含まれていたことが分かる。

水がなければ生きていけない私たちは、水があるからこそ生きていることを心に留めておく事が大切だと思った。「水をたくさん飲む人」と「あまり飲まない人」に別れることは決してない。今生きている人々は、限りない量の水を摂取してきたのだから……。

佳作 (岩手県知事賞)

水の問題と大切さ

盛岡中央高等学校附属中学校

二年 畠山 いちか

日々、何気なく使っている「水」ですが、「水」は生きていくうえで欠かせないものです。そんな、生きるために絶対に必要な「水」の問題と大切さについて考えてみました。

まず、先日、祖父母の家に行ったとき、山のある場所から湧き水のようなものが流れているところを見つけてきました。湧き水が集まると、小川となり、大きな川となつて、海に流れこみます。そして、海の一部が太陽により蒸発され、雨・雪・霧などとなったものが地上に降つて、地面に浸透していき、また地下水や湧き水などになるという「水の循環」が行われます。このように考えてみると、水の循環や、自然の働きはとても凄いものだと思われ、伝わってきました。

次に、蛇口をひねればすぐ出てくる水ですが、この

水こそ、大切に使っていかななくてはならないのだと思います。なぜなら、地球上にある水のうち、我々人間が利用できる水の量はとても少ないからです。水循環により、地球全体の水の量は約十四億立方キロメートルと、一定の量を維持していますが、そのうちの、人間がすぐに利用できる水は、全体のわずか〇・〇一パーセントととても少ないです。また、現時点で全人口の四割が水不足に直面しており、また全人口の約四人に一人である二十二億人は、安全に管理された水を飲むことができていない状況にあります。このままだと、世界の人口増加に伴う「水の使用量増加」や、水が汚染されることによつて、水を使える範囲が狭くなり、水についての問題が深刻化されていくと思います。

さらに、水道水をそのまま安全に飲める国は、日本を含めて、世界で九く十五か国程度と非常に限られていることを知り、水道水をそのまま、好きな量だけ飲むことのできる毎日は、決して、当たり前ではないということがよく分かりました。

最後に、災害時についてです。災害時、生存の観点で、一番必要となるのは圧倒的に水です。水がなければ三日程度しか生きることができませんが、食料がなくても、水があれば、数週間以上生き延びることのできる可能性があるそうです。また、飲料水としての役割の他に、洗濯、入浴、調理など、様々な場面で役立つ「水」は、災害時でも、必要不可欠な存在です。このように、いつ災害などが起きても良いように、普段から、水を備蓄しておくことが大事だと実感しました。

「水」は、無限にありそうに見えて、有限であり、あと十億年もすれば、地球上の水はなくなってしまうといわれています。十億年はとても長いように感じられますが、二〇三〇年には、水供給が四〇パーセント不足し、世界人口の三分の二は水不足になると予測されているように、現在も、水の問題は深刻化されています。「まだ大丈夫」と思わず、今から、将来に向けて、水についての問題を考えていくことが重要だと思いました。これからも、水の深刻さや、大切さ、水が自由

に使えることが当たり前ではないことを身にしみながら生活していきたいです。